



# 朝日

〈静岡県〉 小泉 安香里 こいずみ あかかり 31歳

私が看護師1年目のことだ。HCU(高度治療室)病棟で、「知識も技術も半人前でこんな私に何ができるのだろう」と悩みながら毎日の勤務に追われていた。そんな日々の中で大動脈解離を発症し、安静療法中のAさんに出会った。60歳代のAさんにとって、ベッド上での絶対安静はストレスも多く、身体的にも精神的にもつらかったと思う。

ベッド上での全身清拭も、新人の私では不安もあったと思う。しかしAさんは「あー気持ち良いなー。ありがとね。ベッドの上で寝ているんだけど、足の裏の刺激がなくてね、こんなに足の裏を気持ち良く拭いてもらえたのは初めてだよ」と言ってくれた。私はそこまで考えて拭いて

いたわけではなかったけれど、心からの気持ち良かったという言葉がともうれしかったのを覚えている。

ある夜勤の日、明け方に病棟の廊下の窓からとても大きくてきれいなオレンジ色の朝日が見えた。本当にきれいな朝日だったので、患者さんにも見てほしいと思った。頭に浮かんだのが、安静度が拡大して車いすに乗れるようになったAさんだった。Aさんを誘い、車いすを押して廊下に出ると、「こんなにきれいな朝日が見られる日が来るなんて」と喜んでくれた。

その日の勤務交代後、残った記録をしていると看護師長さんに声を掛けられた。私は、「また何か失敗したのかな」と心配になった。しかし、

師長さんからは「Aさんと朝日を見ただってね、とても喜んでいたらよ。これが看護なのよ」と言ってもらい、初めて看護師として認めてもらえたような気持ちになった。

その後、退院したAさんが私を訪ねてくれた。社会復帰されていて、Aさんが最初は誰か分からなかったけれど、元気に会いに来てくれたことが本当にうれしかった。

あれから10年。私がこうして出産後も看護師として職場に復帰し、私らしく患者さんを励ましたいと奮闘するのも、Aさんとの出会いがきっかけだからだと、朝日を見ると思えます。

